

津山藩の成立と家臣団形成

瀬 島 宏 計

はじめに

本稿は津山藩における家臣団形成原理とその背景の解明を課題とする。従来、津山藩家臣団を扱った研究は竹内知恵氏による新参御取立・新参御役人の研究、『岡山県史』、『津山市史』の家臣団に関する概略説明、磯田道史氏による幕末期の足輕・中間奉公の研究があるに過ぎず、津山藩家臣団の形成を詳細に分析した研究はなかった。しかし、最近、佐藤宏之氏は、家中形成の普遍性に日本型官僚制原理を見出そうとする谷口昭氏の研究視点を継承し、津山藩家臣団の再編成を検討した。⁽⁵⁾ 佐藤氏の研究は、津山藩家臣団の再編成を分限帳と津山藩士の由緒書である「勤書」⁽⁶⁾を主に用いて数量的に分析する一方、津山藩成立以前の松山・福山配流時代、柳原時代における家臣団形成の特質とその背景の考察にやや欠ける。

このような研究史の状況により、本稿では、津山藩成立以前の当主松平光長とその養子綱国を取り巻く状況と津山藩成立期の藩政の動向を踏まえつつ、単なる人的編成としてではなく、その内部における秩序形成をも含めたものとして家臣団形成を検討する。そして先稿⁽⁷⁾において十分に果たし得なかった安永改革期以前の津山藩権力構造、とりわけ御用席（御用所）を構成し、津山藩の意志決定に強力な権限を有した家老・年寄を中心とする権力構造解明と津山藩における家門ないし元嫡流意識の藩政への影響の問題を考える一助としたい。

表1 宝永5年の津山藩家臣団構成

格式・所属	人数	格式・所属	人数
城代	6	入江縫殿組大番衆(五番)	15
年寄	6	澤幡兎毛組常詰大番	25
添城代	3	朝比奈五郎八組中奥	4
奏者番	6	平中奥	9
大番頭	12	平野丹下組中奥	5
小性頭	5	平中奥	9
大目附	10	山田八左衛門組中奥	3
町奉行	2	平中奥	10
中奥頭	10	大目附支配祐筆衆	7
小従人頭	11	城内火事番役	3
簀奉行	2	奏者衆支配	12
先手組	6	外科	5
鎗奉行	2	大坂留守居役	6
江戸詰先手組	3	海老原源惣組小従人	13
使番	16	宮部清右衛門組小従人	12
聞番	3	海老名兵藏組小従人	10
江戸取次	6	江戸詰小従人	7
勘定奉行	4	小従人役者	4
大勘者	18	大目附支配祐筆衆	4
江戸詰振舞奉行	1	同江戸詰祐筆衆	5
江戸勘定奉行	1	勘定奉行支配大役人衆	4
江戸切支丹奉行	1	勘者支配大役人衆	10
江戸料理人頭	1	茶道衆	5
江戸作事奉行	3	江戸詰大役人衆	1
佐藤織江組小性衆	3	江戸茶道衆	3
小納戸	6	勘者支配小役人衆	33
刀番	8	帳附	11
膳番	3	勘定奉行支配小役人衆	18
手道具奉行	2	大工棟梁	5
櫛揚	2	料理人衆	4
平小性	13	江戸詰小役人衆	24
小児性衆	2	笹木勘右衛門組歩行	5
駒井新八組小性	3	平歩行	14
刀番	2	安嶋彌右衛門組歩行	5
膳番	5	平歩行	15
小性衆	7	吉村友彌組御前坊主	11
渡部惣右衛門組大番衆(荅番)	18	同支配老中坊主	8
長澤又右衛門組大番衆(弐番)	21	小性衆目附坊主	1
児玉藤右衛門組大番衆(三番)	19	惣坊主衆	11
大橋多宮組大番衆(四番)	18	合計	626

※出典「宝永5年正月津山藩士分限帳」(『津山温知会誌』第六編、津山温知会、1913年所収)

まず、考察をはじめるにあたり、津山藩家臣団の概要を述べる。

津山藩成立直後最も早い時期の分限帳である「宝永五年正月津山藩士分限帳」⁽⁸⁾によれば、宝永五年（一七〇八）当時、津山藩の家臣団は六二六名（足輕以下を含まない）で構成されていた（表1）。

格式について、幕末期の事情を伝える「懷旧隨筆」⁽⁹⁾には、家老から次坊主までの二六種とあり、明治十九年（一八八六）に作成された「鶴山藩譜抜抄」⁽¹⁰⁾には、同様に家老格から坊主格までの二五種とあり、概ね二五種程度の区別があった。

家格については大別して御譜代・古参・新参の三種類があった。「懷旧隨筆」⁽¹¹⁾によれば、「家筋が、御譜代・古参・古参御取立の分は、生涯無役御番方と云、御広間番のみにて終るとも、其子は三組と云、御小性・中奥・大番等の組より下たには降らず、新参家としては三組の俸は、父無役にて終れば、其子は小従人組、又其子は大役人と次へく坊主格迄段々と格式落つる故に、競ふて勤向を勉励せしものなり。」とある。御譜代・古参・古参御取立の者は、相続のさい、小性・中奥・大番組以下に格式が下がることはなく、一方、新参は、坊主格まで格式が下るとあり、家格によって相続のさいの格式・俸禄等に厳然たる格差が設定されていた。

以上のような津山藩家臣団は、どのようにして形成されたのであろうか。次章以下、松山・福山配流時代、柳原時代、津山藩成立期の三期の政治構造等を踏まえつつ各時期の家臣団について検討する。

一 松山・福山配流時代の家政構造と家臣団

ここでは、越後高田藩改易から光長・綱国赦免までの家政構造と家臣団について言及する。なお、以下特に註記しない事実の典拠は「江戸日記」⁽¹²⁾である。

表2 松山・福山配流時代の松平家家臣団構成

所 属	人数	割合 (%)
光長供奉	18	21.4
光長供奉 (取立)	4	4.8
光長供奉 (家来)	17	20.2
小計 (光長供奉)	39	46.4
綱国供奉	11	13.1
従公儀年々合力米三千俵取立之者	8	9.5
綱国供奉 (家来)	2	2.4
小計 (綱国供奉)	21	25
小計 (供奉全体)	60	71.4
松山書状取次 (在江戸)	1	1.2
伊達御前 (光長二女稻子、伊達宗利室) 守	2	2.4
浄信院 (光長側室丹羽氏) 附	1	1.2
宝珠院 (忠直長女亀子、高松親王室) 附	2	2.4
源正院 (光長嫡子綱賢継室園池氏) 附	1	1.2
二ノ宮 (忠直長女亀子の二女) 附	2	2.4
不参	6	7.1
松山ニ而抱之者 (足輕並)	9	10.7
小計 (供奉以外)	24	28.6
合計	84	100

※ 松山へは、「侍二十人、足輕・中間三十人ト旧記ニ有之」(計50人)、福山へは「侍拾人、足輕・中間十五人ト旧記ニ有之」(計25人)と同史料に記されている。しかし、ここでは史料に記載の人数で分析した。

出典：「松山并福山江御供名面帳・柳原分限帳并順席帳」(『上越市史』別編5 藩政資料一、上越市史編さん委員会、1999年所収)

延宝九年(天和元年、一六八一)六月二十一日の綱吉による越後騒動の親裁直後である二十三日、越後高田藩主松平光長は、内命により、二女稻子の嫁ぎ先である伊予宇和島藩主伊達宗利の青山上屋敷に移り、二十五日、綱国は天徳寺に退いた。二十六日、光長は近江彦根藩主井伊直興の屋敷で、綱国は若狭小浜藩主酒井忠直の屋敷でそれぞれ光長は松山、綱国は福山への配流を申し渡された⁽¹³⁾。そして、七月朔日に光長が、翌二日に綱国が、配流先に立出し、光長は八月朔日に松山に到着した。綱国の到着日は不明である⁽¹⁴⁾。

前述の諸事実から、光長・綱国配流の前段階で、二つの事実を指摘できる。第一は、光長と綱国は、越後騒動の処分が申し渡される以前、居所を別にしていて、第二は、処分の申し渡しから配流先立までの期間が極めて短いこと、これら二点である。

よつて、光長・綱国供奉の編成は、在江戸の旧高田藩士のなかから、各々俄か仕立てで行われたのではないかと考えられる。

この点について、「松山并福山江御供名面帳」¹⁵（以下「御供」と表記する）の分析を通じて検討する（表2）。

「御供」に記載されている人物は、合計八四名（足輕以下を含む）であり、光長供奉の三九名・綱国供奉の二一名・その他（光長の妹・娘に随行した家臣等、配流先不参者を含む）二四名に大別できる。八四名のうち、旧越後高田藩士であると思われるのは、四四名で、全体の約五二・四％を占める。¹⁶ 旧藩士以外のうち、二一名（全体の約二五％）は、越後騒動以後に「御取立」・「御抱」になっている。残りの一九名（全体の約二二・六％）は、旧藩士に随行した家来である。以上から、「御供」に記載のある人物のうち、旧越後高田藩士は、約半数を占めるに過ぎなかったことがわかる。

次に、光長・綱国供奉の構成について検討する。まず、光長供奉三九名のうち、旧藩士は一八名（光長供奉全体の約四六・二％）、「御取立」が四名（約一〇・三％）（うち二名はもと光長供奉の旧藩士の家来）、旧藩士に随行した家来一七名（約四三・六％）であり、その頭目は、延宝期に詰衆であつた佐久間主計（高田藩時代七〇〇石）であつたと思われる。一方、綱国供奉二一名のうち、旧藩士二一名（綱国供奉全体の約五二・四％）、「従公儀年々御合力米三千俵御取立之者」八名（約三八・一％）（うち四名はもと光長供奉の旧藩士の家来）、旧藩士に随行した家来二名（約九・五％）で構成されており、頭目は綱国付家臣の筆頭で年寄の小岸藤左衛門の代わり、安藤靱負（高田藩時代五〇石七人扶持）であつたと考えられる。従つて、綱国供奉のなかで、旧越後高田藩士の比率は半数を漸く上回る程度である。しかし、光長供奉では、半数を下回つた。これに「松山二而御抱之者」九名を加えると、光長供奉のうち、旧越後高田藩士の占める割合は、約三七・五％にまで下がる。綱吉の親裁に旧高田藩士が動揺し、供奉者の編成を十分に成し得なかつたのではないか。なお、配流時代の家臣団の俸禄は不明である。

続いて、延宝期越後高田藩時代の「御供」にみえる旧藩士の位置について考察する。旧越後高田藩士であったと思われる四四名のうち、三三名（七五%）¹⁷が確認できる。判明した三三名は、延宝期越後高田藩家臣団全体の人数一三〇八名の約二・五%に相当する。延宝期に綱国付であった家臣一五九名のうち、一〇名（六・三%）を「御供」で確認でき、一〇名のうち八名が綱国付となっていた。「御供」に記されている旧越後高田藩士は、光長・綱国の側近に連なる役職に就き、藩内では中下層に位置する者が多かった。¹⁹

「御供」に名前のある人物のなかで、「勤書」に記載のある人物は二八名である。これは「御供」全体の約三三・三%に当たる。そのうち、御譜代は二五名、残りは全て古参御取立である。「古参御取立」の三名のうち、二名は「松山二而御抱之者」である。彼らは光長の配流先松山で遅くとも貞享三年（一六八六）の末頃までに足軽並で抱えられた者であり、当時最も新しく家臣に加わった者であるから、家格を低く設定されたのではないだろうか。

このように、越後騒動の処分申し渡しから配流先出立までの短期間に、光長と綱国の供奉者が編成された。その構成員を分析すると、旧高田藩士を中核としてはいるものの、二一名（光長・綱国供奉の約三五%）を新たに「御取立」・「御抱」えによつて補充し、漸くその体裁が整えられている。

松山・福山配流時代は「大小之義者越後殿ヲ始、下々迄無刀二而可被連」²¹との幕府の指示により、光長以下全員が「無刀」であり、貞享四年十一月朔日に光長配流赦免の老中奉書が到着するまで、少なくとも光長とその供奉者は帯刀できなかった。津山藩成立以後、光長・綱国供奉者の殆どが御譜代の家格を得、家督相続や俸禄等で他家臣より優遇された原因の一つとしてこの事実は重要であると思われる。

続いて松山・福山配流時代の家政構造と家臣の召し抱えにつき、史料の制約により松平光長の場合のみ言及する。延宝九年八月一日、光長は松山に到着し、八月六日、役儀の申し渡しがあった。それを示したのが表3である。翌天和二年（一六八二）八月十日、光長は松山藩松平家を通じて家臣の増員を願ひ出ていたところ、幕府より

表3 松山配流時代の松平光長家臣団の主要構成

役職名等	人 名
用人	佐久間主計 渥美権左衛門
無役	黒田彦四郎
(大)横目	伊藤善八
近所用達	小須賀藤兵衛 大熊六左衛門 佐久間奎之助 渡部惣右衛門
膳番	黒田孫三郎 山田次郎三郎
勝手方	海老原孫助 佐久間奎之助 渡部惣右衛門
横目	太田仙助 下村供右衛門
医師	大館玄周
小役人	入江吉左衛門

出典：「江戸日記」延宝9年8月6日条

「中間御増被成候て他国者無用、当地者致吟味可被成召抱候。家来中召仕之儀者此表にて忝人宛」との回答があり、九月三日より中間五人が召し抱えられた。光長による家臣の増員願いは、光長供奉者の編成を十分になし得なかったことと無関係ではあるまい。

天和四年（貞享元年）四月五日、足輕荻野善助が頓死した。四月十一日、用人佐久間主計と渥美は松山藩松平家に跡の召し抱えを申し出て、翌十二日に松山藩松平家の家老より許可を得、十三日、勝手方海老原孫助・佐久間奎之助・渡部惣右衛門（佐久間奎之助と渡部は近所用達兼役）より「御国者迎最早此者忝人ニ而御坐候。其上御用ニ茂立可申者」として大熊六左衛門家来勘助が推挙され、即日到大熊の許可を取り付け、四月十六日には足輕笠嶋勘助として九石二人扶持を給せられた。以上の経緯から、遅くとも貞享三年の末頃には高田出身の足輕候補者がおらず、やむなく松山にて足輕が召し抱えられたと考えられる。また、家臣の増員には幕府の許可を必要とする一方、家臣の補充は松山藩家老の許可があれば容易に実現したことが窺える。

翌天和三年二月四日、無役黒田彦四郎に対し、「老人之儀候へ者古キ事をも存知候」として用人佐久間主計と渥美から招かれた場合、二人の相談に応じるようにとの光長の上意があった。²²これにより、黒田は光長家臣のなかで佐久間主計・渥美に続く事実上第三位の席次であったものと思われる。二月七日、御用のさいには膳番役山田次郎三郎を招くこと、佐久間主計と渥美が関与するほ

のではない御用については山田に申し上げること、もっとも御用についてはまず大横目伊藤善八と黒田に知らせて相談するようにという趣旨の光長の上意があった。貞享四年（一六八七）八月十五日、光長は近所用達小須賀藤兵衛と大熊六左衛門を召し、兩人に対し従来は用事のさいに用人佐久間主計と渥美が招いて相談していたけれども、今後は「何事二而も無遠慮」く申し上げること、従来通り用人佐久間主計・渥美から招請されたときは相談に応じること直達した。⁽²³⁾

このように、松山・福山配流時代の当初は佐久間主計と渥美の両用人に担われていた御用の相談役として無役黒田と大横目伊藤が参画し、さらに両用人に準ずる立場に膳番役山田が就任した。そして末期には近所用達の小須賀と大熊が登用され、両用人に対し、無役黒田と大横目伊藤以上の発言権を認められた。

二 柳原時代の家政構造と家臣団

ここでは、貞享四年（一六八七）の光長赦免から、元禄十一年（一六九八）に松平宣富が綱吉から津山城と美作国のうち一〇万石を拝領するまで約九年間の家政構造と家臣団について検討する。以下特に註記しない事実の典拠は引き続き「江戸日記」である。

貞享四年十月二十四日、幕府は在府中の越前家一門を召して光長赦免の命を伝え、伊予松山藩主松平定直に老中奉書を発給し、その奉書は十一月朔日、松山に届けられた。十月二十五日、出羽山形藩主松平直矩と出雲松江藩主松平綱近の使者が松山に立出し、十一月十六日に到着して、光長を江戸に召し帰され、合力米として三万俵を下される旨を伝えた。十一月八日、光長に柳原屋敷を賜わる旨が老中より達せられ、同月二十五日、光長は松山を発ち、十二月十五日、柳原屋敷に到着した。同月二十七日、綱国赦免の命が伝えられ、貞享五年（元禄元年）二月十四日、

綱国は柳原屋敷に到着し、以後柳原時代を迎えることになる。

まず柳原時代の家政構造について言及する。

松平光長が柳原に到着して七日後の貞享四年十二月二十二日、一門から以下の基本方針が示された。

一、御一門様方御相談ニ而大和守様^(直軽)・上野介様御出被遊、御書付一通御渡被成。其趣者、御直之面々他出成次第可有遠慮候。雖然無抛御用ニ而罷出候節者其趣御広間当番之面々江相達可罷出候。附り、足輕以下者佐久間主計・渥美権左衛門判形之札ニ而御門出入可致候。他所之者御屋敷江入候義先無用之事。御家来・下人之儀、宗門其外遂吟味慥成者少々召抱尤之事。右之趣共御極被遊之由被仰渡也。

すなわち、光長家来の他出遠慮、佐久間主計・渥美両人の判形による足輕以下の出入り制限、余所者の屋敷への立ち入り禁止、家来・下人の召し抱えは厳選して少数とすること以上四点であった。さらに「足輕・中間等之儀、御入用次第御三人様方御貸人可被成之由」とあり、翌年正月十二日には松平直矩・松平綱近・播磨明石藩主松平直明の帳付各一人・歩行各二人合計九人が光長に御目見しており、柳原時代当初、光長家中における輕輩の不足は一門からの貸人によって対処されていた。

十二月二十七日には、光長の登城・寺社参詣等について幕府の指示があった。

一、申ノ下刻大和守様方小河原武太夫を以被仰進者、御窺之儀共御老中江被得御内意候処、月次之御礼且歳暮之御礼御無用之事、惣躰御登城之儀者あなた御左右次第御勤可被成之由、上野・増上寺江御参詣之儀、此度者可然との御事、御見廻衆江御対面之儀、御親類縁者方計之事。右之通御差図之由。

これによると、老中に問い合わせたところ、月次と歳暮の礼は無用で登城は老中からの指図次第とすること、寛永寺・増上寺参詣は今回のみの許可、見廻衆との対面は親類・縁者からの場合のみ許可の三点で、光長の行動には赦免後も依然として一定の制約が加えられており、柳原到着後の綱国も同様であったと考えられる。

翌貞享五年（元禄元年）正月二十三日には、一門より佐久間主計・渥美に対し「諸事穩便相慎可然」との基本方針が指示されて家臣に申し渡され、二月十三日の綱国到着前日にも同趣旨の書付による申し渡しが再度なされた。

このように、柳原時代は松平直矩・松平綱近・松平直明・出雲広瀬藩主松平近栄・出雲母里藩主松平直丘と後に越前福井藩主松平吉品を加えた六人からなる越前家一門⁽²⁴⁾を媒介に幕府との交渉がなされたのみならず、光長と綱国の家政についても一門と相談しつつ執り行われた。⁽²⁵⁾越前家一門の六人のうち松平直矩と松平近栄の兩人が越後騒動のときと同様に中心的役割を果たしたと考えられる。

二月七日、以前一門が歩行・小算役・小役人・坊主・足軽・中間等の「軽キ者」の召し抱えを佐久間主計と渥美権左衛門の「兩人了簡」で行えばよいとの見解を示したことをうけ、佐久間主計・渥美兩人は一門五人の家老に詳細な書付を提出した。二月十五日、松平直矩・松平綱近・松平直明・松平近栄の四名は柳原屋敷を訪れ、一門から「軽キ者」の召し抱えについて老中に窺ったところ、佐久間主計・渥美兩人の「了簡」による召し抱えが許可されたと光長に伝え、光長退出後、「御人積之儀、最前より輕候得共成次第減、目二不立様被召抱可然之由」、つまり「軽キ者」の召し抱えであるけれども、目立たない程度に少なめの人数とするようにとの一門の意向を佐久間主計・渥美兩人に示した。二月十八日、光長・綱国、佐久間主計・渥美は一門に侍の召し抱えを通知した。

一、今度侍分被召抱候付、御一門様方御家中ニ由緒在之者御望被思召、則御五人様江御連名之以手紙侍共御抱可被下由被仰遣之。右之趣ニ付、御五人様之御家老江佐久間主計・渥美権左衛門方より右侍共奉公之品并御合力米委細以書付申達之。

すなわち、一門の五人へは光長・綱国連名の書状にて「由緒」を有する家来の召し抱えを伝え、一門の五人の各家老へは佐久間主計・渥美より奉公の内容と俸禄米等の詳細を書き送っている。「柳原時代分限帳⁽²⁶⁾」によると一門から二七名の召し抱えがあり、その内訳は小姓組二名・中奥組四名・大番組九名・小算役一名・次祐筆二名・小役人

表4 一門五人からの召し出し家臣一覧

名 前	所属・役職	俸 禄	出身	召し出し年代
長坂平四郎	小姓	100俵 6 人扶持金20両	綱近	元禄1, 3, 1
松波助之進	小姓組	100俵 6 人扶持	直明	元禄1, 3, 15
安井喜多右衛門	中奥組	80俵 5 人扶持	直明	元禄1, 3, 15
長井藤九郎	中奥組	80俵 5 人扶持	近栄	元禄1, 3, 22
二橋弥市右衛門	中奥組	70俵 5 人扶持	直矩	?
吉田作太夫	中奥組	70俵 5 人扶持	綱近	元禄1, 3, 1
長尾小次郎	大番組	100俵 6 人扶持	綱近	元禄1, 3, 1
村山又兵衛	大番組	100俵 6 人扶持	直矩	元禄1, 3, 16
鈴木喜右衛門	大番組	100俵 6 人扶持	直矩	元禄1, 3, 16
三原金太夫	大番組	80俵 5 人扶持	綱近	元禄1, 3, 1
本多新平	大番組	80俵 5 人扶持	直丘	元禄1, 4, 24
藤本伴右衛門	大番組	80俵 5 人扶持	直丘	元禄1, 3, 1
馬場縫殿右衛門	大番組	80俵 5 人扶持	直明	元禄1, 3, 15
天野藤太夫	大番組	80俵 5 人扶持	近栄	元禄1, 3, 22
竹垣庄右衛門	大番組	80俵 5 人扶持	近栄	元禄1, 3, 22
渋谷助左衛門	小算役	50俵 4 人扶持	直矩	?
成田善助	次祐筆	金 8 両 3 人扶持	直矩	?
中村九左衛門	次祐筆	金 6 両 3 人扶持	直矩	?
川口小兵衛	小役人	金 6 両 3 人扶持	直矩	?
長谷太兵衛	小役人	金 6 両 3 人扶持	綱近	?
岩村平左衛門	小役人	金 5 両 3 人扶持	直明	?
岩田甚右衛門	小役人	金 5 両 3 人扶持	近栄	?
中西与右衛門	小役人	金 5 両 3 人扶持	直丘	?
江司武右衛門	徒目付	金 6 両 3 人扶持	直矩	?
大島仁右衛門	徒目付	金 6 両 3 人扶持	直矩	?
吉岡利兵衛	徒	金 6 両 3 人扶持	直明	?
柴田奎左衛門	徒	金 6 両 3 人扶持	綱近	?

出典：名前・禄高・出身は「柳原時代分限帳」（『津山温知会誌』第7編、津山温知会、1914年所収）、所属・役職は「松山并福山江御供名面帳・柳原分限帳并順席帳」（『上越市史』別編5 藩政資料一、上越市史編さん委員会、1999年所収）、召し出し年代は「江戸日記」によった。

※1 安井喜多右衛門について、「柳」には「安井喜太右衛門」と記載。

※2 長井藤九郎について、「柳」には「永井藤九郎」と記載。「江」によると、元禄1, 4, 6、「弥三郎」から「藤九郎」に改名。

※3 川口小兵衛について、「柳」には「河口小兵衛」と記載。

※4 「江」は「江戸日記」、「柳」は「柳原分限帳并順席帳」の略。

表5 柳原時代当初の松平光長家臣団の主要構成

役職等	人 名
家老	佐久間主計 渥美権左衛門
小性組支配	山田次郎三郎
大目付格	小須賀藤兵衛 大熊六左衛門
中奥（組）支配	伊藤善八
歩行支配	黒田孫三郎 佐久間奎之助
勘者※	佐久間奎之助 渡部惣右衛門
勘定奉行格	海老原孫助
作事奉行格	太田仙助
中奥横目	太田仙助 下村供右衛門

出典：「江戸日記」貞享5年2月26日条 ※勘者格を含む。

五名・徒四名で、大番組については全員、次祐筆三名のうち二名が一門から召し抱えられた者に占められていた（表4）。

以上から、「諸事穩便」と足輕以下の召し抱えであっても目立たない程度に少数とするようにとの一門の意向と、当時光長と綱国とその家中に一定の外出制限があったことを勘案すると、光長と綱国が一門からの侍分の新規召し抱えを優先したのは当然の帰結であったと考えられる²⁷⁾。

二月二十六日、役儀の申し渡しがあった（表5）。松山・福山配流時代の家政構造と比較して注目すべきは、松山・福山配流時代の当初には佐久間主計・渥美の次席は黒田彦四郎と伊藤善八であったのに対し、柳原時代には山田・小須賀・大熊が伊藤の上席となっていることである²⁸⁾。このことは松山・福山配流時代に山田・小須賀・大熊が佐久間主計・渥美による「御用」への相談役等としての参画に即応したものであると思われる。この日、伊藤善八・小四郎・渡部惣右衛門・倅惣次郎・海老原孫助・倅五右衛門が小姓に召し出された。そして松山時代の足輕佐藤彦右衛門・市村九助・近藤善右衛門・笠嶋勘助を「御取立侍分」とし、「柳原分限帳并順席帳」によると彼らは全員中奥組に属した。同史料によれば、松山に供奉した入江吉左衛門・太田定右衛門・尾崎久左衛門・市村三郎左衛門の四名は全員小姓組となった。ゆえに柳原時代、小姓組（二名）・中奥組（二五名）・大番組（九名）の三組（合計三六名）は松山・福山以来の家来とその子息、そして一門より召し出された者に占められていたとい

える。

三月十四日、かつて綱国に供奉していた本多宇右衛門・加藤又五郎・大橋奎兵衛・館喜左衛門・加藤馬左衛門を光長付の家臣とし、三月十七日、本多に役儀の申し渡しがあった。

一、本多宇右衛門 御前江被召、奏者役前々々相勤、巧者ニも在之付、右之段可相勤由御懇之 御意在之。
すなわち、本多は高田藩時代の先役である奏者役を命じられた。三月二十三日、加藤又五郎には「元役小納戸」、大橋には「元役御膳番兼役小納戸・御腰物番役」、館には「元役中奥横目」、加藤馬左衛門には「御出之刻者如前々定御供」と加藤又五郎以下四名にも高田藩時代の先役を命じられた。⁽²⁰⁾ 四月十六日、大橋は伊達宗利に嫁いだ光長二女稲子の守役に転役し、五月九日、十太夫に改名した。大橋も代替わりのうえ先役を命じられたといえる。⁽²¹⁾ 彼らは高田藩時代の役職に復職後、昇進を遂げる。八月九日、加藤又五郎は小納戸に加え大目付格の兼役となり、館は中奥横目を免ぜられて組外となり、手代二人を預けられ、代わって加藤馬左衛門は中奥横目となった。九月晦日、加藤又五郎は他の大目付格小須賀と大熊同様祐筆と書役の支配を仰せ付けられた。

そして元禄二年六月九日、本多は家老渥美と同格の地位を与えられた。

一、佐久間主計儀、思召之子細有之事候間、重キ御用弥可相計之。且折々病氣ニも候間、差而御用無之節者出仕之義者可致勝手次第候。遂保養、末々相続候様ニと被思召候。渥美権左衛門・本多宇右衛門代々毎日可相詰候。軽キ御用之義、兩人ニ而尤無遠慮可相勤候。右三人江御直ニ被仰付之。附り、連名・連判之儀可為三人事。

これによると、従来の家老佐久間主計・渥美による兩人の執務体制から、佐久間主計は病氣を理由に御用のないときの出仕を免ぜられ、「重キ御用」のみの関与とし、それに代わって渥美と本多が毎日交代で詰めて「軽キ御用」を専任するという三人による執務体制への転換を光長は指示したと理解できる。元禄二年正月元日の御目見は佐久

間主計と渥美、その次に本多・山田・小須賀・大熊・加藤又五郎・伊藤の順であつたので、本多は奏者就任以後、元禄二年三月十五日に小姓組支配を免ぜられて以来「御内御用」と奏者を勤めていた山田、松山・福山配流時代に佐久間主計・渥美の相談役を経験した小須賀・大熊を飛び越えて第三の座席を獲得していた。当時の座順からすれば本多の登用は至当であつたといえる。

しかし元禄六年八月五日、本多の死去により三人による執務体制は早くも解体し、佐久間主計・渥美の二人体制に復帰したものと思われる。なお、本多宇右衛門の跡を継いだ本多六郎左衛門は同年十月二十八日、従来の「中奥支配」(中奥頭)を免ぜられ、「番頭之格」(大番頭格)を命じられた。

十二月十五日、本多宇右衛門死去に伴う大規模な役替えがあり、本多宇右衛門の後任の奏者に伊藤善八、伊藤の勤めていた「番組支配」(大番頭)の後任に本多六郎左衛門がそれぞれ就任した。翌元禄七年正月四日の御目見は、佐久間主計・渥美・安藤鞆負・山田・小須賀・大熊・伊藤・本多・加藤又五郎の順となっており、本多は伊藤の次まで座順を下げてゐる。ここで注目すべきは、本多宇右衛門が奏者に就任した翌年の座次は佐久間主計、渥美の次の第三位であつたにもかかわらず、伊藤の場合、山田、小須賀、大熊を飛び越えることなく、座順は綱国付筆頭家臣の安藤鞆負の加入によりむしろ降下していることである。これは、本多宇右衛門が高田藩時代の大將分本多監物の二男という家筋の者であつたことと密接な関係があるであろう。また、伊藤は元禄七年当時六十一歳で、八月六日幕府より駕籠使用を許可されており、当時から歩行困難を伴う程度の老衰の兆候がみられたのではないかと推測できることも無関係ではあるまい。あるいは、この座順は本多の死後、佐久間主計・渥美の御用に山田・小須賀・大熊が一定程度関与していたことを証するものであるかもしれない。

元禄八年六月七日、佐久間主計が死去し、六月十三日、光長より新たな御用の執務体制について上意があつた。

一、山田次郎三郎・小須賀藤兵衛・大熊六左衛門此三人権左衛門江差統御用可相達候。尤、判形等も権左衛門

同事可仕之旨、御前被召出、御直ニ被仰付候。尤、權左衛門義も罷出、御執成申候。

これによると、今回、松山・福山配流時代に佐久間主計・渥美の御用に相談役等としての参画経験を有する山田・小須賀・大熊が家老渥美に次ぐ地位を与えられたといえる。

翌十四日、加藤又五郎と佐久間奎之助が大目付兼任で「御用人之格」となり、古市三左衛門を新たに大目付に任じた。翌十五日、綱国付の伊達与兵衛が加藤又五郎と佐久間奎之助同様大目付兼任で「御用人之格」となり、座席は佐久間奎之助の次となった。七月六日、加藤又五郎と佐久間奎之助は大目付兼役を解かれて用人専任となり、代わって海老原孫助が大目付に就任した。従来、光長の上意の伝達は、直達以外は家老佐久間主計・渥美によってなされていたけれども、以後その役目は加藤又五郎・佐久間奎之助に移行した。⁽³⁾元禄九年二月十一日、山田・小須賀・大熊に対し、「向後八時より罷出相勤候事御赦免」の旨が、一方加藤又五郎・佐久間奎之助・長坂主税に対し、「向後八時より罷出、只今迄家老とも相勤候通可相勤旨」がそれぞれ伝えられた。これにより、従来の家老の職務の用人への移行がさらに進行了かと思われる。なお、ここに渥美の名前がみられない理由として、渥美は元禄九年十二月晦日、病氣を理由に「心儘ニ養生仕、長ク相勤候得ハ御満足被遊候」との上意から、公儀向きの判形等は他の家老と同様に勤めることとしながらも、「月番御勝手方」の判形を免ぜられ、他の家老が他出の場合は従来通りの勤めとするとして役務を軽減されており、二月の時点でもすでに渥美の体調に配慮した職務の軽減が同役間でなされつつあったのかもしれない。長坂主税とは旧綱近家臣の長坂平四郎のことであると推測される。長坂については元禄九年二月七日に小姓頭兼役を免ぜられ、五月二十五日に死去したことを知りうるのみであり、当時の役職は不明である。⁽³⁾

家老と従来の家老の職務移譲によって創設された用人による御用執務体制への移行は、前述の「月番御勝手方」という文言から窺えるように月番制の導入を可能にし、より安定的な案件処理を実現する意図と、家老の一部の職

務の用人への移譲により、当主の執務の一部を従来以上に代行または補佐しうる担い手として家老を位置付ける意図を有したものと思われる。

このような組織的な御用執務体制への移行の背景として指摘できるのは、越後騒動以来越前家一門の中核にあつて松平光長を支えてきた松平直矩が元禄八年四月十五日に死去したこと、当時八一歳という当主光長の年齢、そして前述の光長筆頭家臣佐久間主計の死これら三点である。光長は従来家政を支えてきた松平直矩と佐久間主計を失った。光長自身当時八一歳という高齢の当主であつたのみならず、元禄六年に光長の養子となり、元服を元禄八年六月十八日に控えた源之助矩栄（後の宣富、⁽²⁵⁾当時一六歳、従四位下左衛門督）の家督相続に備え、光長は光長自身と源之助の補佐役としての役割を従来以上に家老に付与する措置をとつたものではあるまいか。なお、光長が隠居し、宣富が家督相続を許可されたのは元禄十年五月六日であり、同年十二月十八日、宣富は侍従となつた。

元禄八年正月元日段階で加藤又五郎・佐久間奎之助・伊達与兵衛より上席であつた伊藤善八・本多六郎左衛門・古市太左衛門が「御用人之格」にならなかつた理由として、伊藤は前述のように当時老衰により執務が困難であつたと思われ、古市も元禄七年八月六日、当時七九歳で幕府より駕籠使用を許可されており、伊藤同様に従来以上の執務が困難であつたからであると思われる。本多については、「勤書」によれば元禄元年九月十九日の召し出しであり、旧高田藩士で松山・福山に供奉した加藤・佐久間奎之助・伊達とは職務の熟達度が全く異なつていたのではないだろうか。源之助の元服を目前に家政の執務体制が以前よりも組織化されたとはいへ、光長家を取り巻く諸状況は当時依然として予断を許さなかつたと思われ、高田藩時代の大将分本多監物の二男本多宇右衛門の養子という家筋よりも、職務の熟達度が高く難局にも対応可能性の高い人物を優先した人選がなされたものと推測する。因みに本多は元禄八年十一月十九日、大番頭から奏者番に転じて伊藤と同役となり、元禄九年六月十五日、本多は用人に就任と同時に六郎左衛門から宇右衛門に改名し、「江戸日記」同月二十四日条によれば、家中への助成に関する

「口上之覚」引用の後、「右之趣頭分江又五郎・左助・宇右衛門申伝之」と早速名を連ねた。この人事は加藤又五郎、佐久間奎之助の「御用人之格」就任と本多の家筋との兼ね合いを斟酌した人事であつたと考えられる。

家老・用人による執務体制の組織化は、家老家・用人家という家格の創出をもたらした。元禄八年十二月十六日、家老と用人の惣領に関する規定がはじめてなされた。

一、老中惣領分罷出相勤候節者、格式先規之通可相勉事。御役柄之儀者、其節可被 仰付事。

一、御用人惣領分罷出相勤候節、御小性相勤候内ハ御小性頭支配ニ而ハ無之候得共、差図可請事。平日上下ニ而可相勤事。

家老惣領の格式については高田藩時代の規則が適用されたものと思われる⁽³⁶⁾。「勤書」によれば、元禄十年十二月二十二日、渥美権左衛門惣領平内・小須賀帯刀惣領三郎兵衛は「御用人次席」となっており、家老惣領の格式として初役を用人次席としたのかもしれない⁽³⁷⁾。用人惣領についてみると、小姓を勤めているときは本来は小姓頭の支配に属さないけれども指図をうけることとあり、他の家臣にはみられない優越的地位の世襲を認められたことが窺える。

次に、柳原時代の家臣団について検討する。

「柳原分限帳并順席帳」によれば、元禄二年（一六八九）正月段階の家臣団は合計三四八名（足輕以下を含む）である（表6）。松山・福山配流時代は八四名であるから約四・一倍の増加であり、柳原時代に入って約一年間のうちに、急速に家臣団が拡大した。松山・福山配流時代の幕府からの支給米は、光長一万俵・綱国三〇〇〇俵の計一万三〇〇〇俵から三万俵に、すなわち約二・三倍の増加であるから、支給米の増加率よりも家臣のそのの方が高い。三四八名のうち、「御供」で確認できるのは、約五二・四％の四四名である。柳原時代には、松山・福山配流時代の約半数の家臣が何らかの理由で家臣団から離脱しており、流動性は高い。「御供」に記載があり、旧越後高

表6 柳原時代の松平光長家臣団構成

格式・所属	人数	役 職 等	俸禄上限	俸禄下限	割合 (%)
組外	24	足輕大将 勘定 内用人 用人 大番頭 大横目 歩行頭 小姓頭 足輕 預ヶ館 <small>めり</small> 中奥頭 青山御前様 守役・同添役 勘者 作事奉行 上臈付 公儀人	17人扶持ニ950俵	6人扶持ニ100俵	6.9
小性組	12	刀番 小納戸 膳番 小姓 腰物番見習 中奥目付 振舞奉行	11人4分扶持ニ170俵	6人扶持ニ100俵	3.4
中奥組	15	櫛揚 祐筆	11人4分扶持ニ150俵	5人扶持	4
大番組	9	取次役	6人扶持ニ100俵	5人扶持ニ80俵	2.6
小算役	6	此口奥相勤三河守附分 大納戸格三河付	4人扶持ニ50俵	4人扶持ニ金7両	1.7
次祐筆	3		3人扶持ニ金8両	3人扶持ニ金6両	0.8
小役人	22	向次祐筆 三河附 中間小支配 二宮附 料理人 三河附料理人 帳附	3人扶持ニ35俵	3人扶持	6.3
徒衆	11	目付 (徒目付カ)	3人扶持ニ金6両	3人扶持ニ金6両	3.2
側坊主	12	茶道格 針立之格	3人扶持ニ金4両	3人扶持ニ金4両	3.4
並坊主	10	老中部屋 三河附	3人扶持ニ金4両	3人扶持ニ金4両	2.9
下男	8	立長院 (綱国母大木氏) 付	2人扶持ニ金3両	2人扶持ニ金3両	2.3
下男下代	3	立長院付	2人扶持ニ金3両	2人扶持ニ金3両	0.8
足輕	79	足輕小頭	2人扶持ニ金3両2歩	2人扶持ニ金3両	22.7
手廻り之者	20	草履取り 鎗 傘 挟箱 口取り 駕頭 駕者	2人半扶持ニ金3両2歩	1人半扶持ニ金2両3歩	5.7
中間	101	中間杖突 並中間	1人半扶持ニ金2両2歩	1人半扶持ニ金2両1歩	29
三河守附衆	13		14人扶持ニ350俵	8人扶持ニ70俵	3.7
合 計	348				99.4

出典：「松山并福山江御供名面帳・柳原分限帳并順席帳」(『上越市史』別編5 藩政資料一、上越市史編さん委員会、1999年所収)

田藩士であつたと思われる四四名のうち、二八名⁽³⁸⁾(六三・六%)を延宝期の分限帳で確認でき、松山・福山配流時代の三三名に比べ五名減少している。その二八名は、柳原時代にはいずれも小性組以上に位置づけられた。一方、「御供」に名前がなく、柳原時代に家臣となつた者のなかで延宝期の分限帳に記載のある人物は確認できなかった。柳原時代の「三河守様御附衆」一三名のうち、一〇人(約七六・九%)は松山・福山配流時代に綱国付であつた者であつた。内訳は、旧越後高田藩士二名と残りは全て「従公儀年々御合力米三千俵御取立之者」であり、綱国側近の残留率の高さが窺える。

柳原時代の家臣の俸禄について、貞享五年(元禄元年)五月二日、次のような申し渡しがある。

一、古市太左衛門、暮二被下置百俵今日古参並被 仰付候付被下。且扶持方も古参同前被下之。

この記事によれば、「御扶持方も古参同前」とあり、扶持米について古参は優遇されていたと予想される。因みに古市は「高田」によれば高田藩時代惣物頭弓大将で四〇〇石の知行取であり、松山時代には江戸にあつて書状の取次役を勤めた人物で、同年二月二十七日に二〇〇俵で召し出され、悴三左衛門も一〇〇俵の小姓に召し出されていた。扶持米については同時期に召し抱えられた小沢又右衛門の俸禄につき、貞享五年七月九日、次のような申し渡しがなされた。

一、小沢又右衛門、今日古参並被 仰付。依之、御合力米当年分不残被下、御扶持方四人扶持増、都合拾人四分之積被下之(以下略)。

この記事には先の古市の場合のように扶持米について「古参同前」と書かれてはいないけれども、「御扶持方四人扶持増」とあることから、光長家中のうち古参の者への扶持米は四人扶持程度多く支給されていたものと思われる。因みに小沢は京都の浄信院(光長側室丹羽氏)付の者で、貞享五年三月十五日、一二〇俵にて召し抱えられた者である。

元禄元年十一月三日、「当年者初而之儀候故、何茂勝手可為不調」との光長の思召により、家臣に来春分の俸禄のうち半分を下された。そのさい、古参と新参で次のような格差を設けていた。

一、古参百俵取り已下者半分多其割を以被下之、新参者半分被下之。

古参百俵取以下の者へは半分以上を、新参の者へは原則通り半分を渡す取り決めであつた。このように、柳原時代、古参と新参によつて扶持米の支給額と俸禄の渡し方の双方において格差があつたと考えられる。

このような古参と新参の区分は何を基準に設定されていたのであろうか。

古参・新参の区分が明確に示される最も早い時期である元禄三年正月元日の御目見記事を取り上げると、古参は佐久間主計・渥美権左衛門から笠嶋勘助・近藤善右衛門までの二七名であり、彼らは松山に供奉した者と光長が貰い受けた旧綱国付の家臣によつて構成されている。新参は本多宇右衛門養子本多六郎左衛門・古市太左衛門・古市三左衛門・伊藤善八・伊藤小四郎・旧綱近家臣長坂平四郎・渡部惣右衛門・渡部惣次郎・海老原孫助・海老原喜兵衛・旧直明家臣松波助之進・旧直矩家臣渋谷助左衛門・河村竹右衛門・匂坂治五右衛門等で、当時古参惣領と柳原時代に新規に召し抱えられた家臣によつて構成されていたといえる。

古参惣領について、前述の新参海老原喜兵衛は、元禄六年七月二十五日の家督相続後孫助に改名し、「古参之格」と「古参之扶持方」を付与されており、古参の家の惣領が召し出される場合は新参の格を与えられ、家督相続後古参の格を受け継いだものと思われる。

柳原時代には古参・新参以外に「御譜代」という家格の表現がみられるけれども、「御譜代」は古参と同義であつたと考えられる。⁽³⁹⁾

三 津山藩の成立と家臣団の形成

ここでは元禄・宝永期を中心に、当該期の津山藩政の動向を踏まえつつ津山藩家臣団形成について検討する。以後特に註記しない事実の出典は引き続き「江戸日記」である。

元禄十一年正月十四日、宣富は美作国のうち津山城と十万石を綱吉より拝領し、正月二十九日、幕府より米三万俵を拝借した⁽⁴⁾。これにより、宣富家臣団は拡大を開始した。正月二十一日、旧直矩家臣村山又兵衛惣領等を召し抱え、足輕のうち一四人を徒に召し出し、そのうち小頭四人を徒目付とした。そして従来⁽⁵⁾の徒は全て「小十人之格」に昇進した。二月三日には、新規召し抱えの侍の御目見が「依為大勢二三度ニ」分けて行われた。それでも機会が不足したようで、五日にも御目見がなされている。なお、侍の口入れは家老・用人と当時奏者番の古市三左衛門・中奥頭・歩行頭兼役の加藤馬左衛門が担当した。三月七日には

一、辰刻於小書院御譜代・古参之面々新規御加増之御礼申上ル（以下略）。

とあり、新規の家臣召し抱えと足輕・徒の格上げに並行して「古参」の上位に「御譜代」という家格が設定され、それらの家格に属する者への加増がなされた。御譜代は「勤書」の記載からしても柳原時代の古参が、同様に古参は柳原時代の新参が格上げされたといえる。そして、新規に召し抱えられた家臣が新たに新参に位置づけられた。四月十三日、金子吉右衛門と野村岡右衛門兩名が「御家中分限帳精出相認候付」金二〇〇足ずつを頂戴しており、遅くともこの時点で津山藩家臣団の人的編成が一定程度完了していたものと思われる。

五月二十五日、津山城の受け取りが完了し⁽⁶⁾、六月一日、内山下の旧横山刑部左衛門屋敷を「御用場」に定め、早速家臣の屋敷割りに着手した⁽⁷⁾。六月三日には「御用場」において条目と法度書の申し渡しがあり、「但、在方者勘定奉行・郡代・代官・組頭江相渡之、町中者両町奉行江相渡之。」とあつて家臣のみならず、町在の支配に関する

基本方針等も示されたものと推測できるけれども、支配系統を知りうるのみであり、内容は全く不明である。⁽⁴³⁾ 八月十五日、渥美・山田・小須賀・大熊・安藤靱負・伊藤・加藤又五郎・本多・佐久間主計・伊達・笹木・房間造酒が津山にて下屋敷を拝領した。当時の家老、用人またはそれに準ずる立場にあったと思われる人物のみの下屋敷拝領は、家臣団内における彼らの地位の優越性を一層明示したといえる。

正月二十五日、家老山田主膳と用人加藤又五郎は光長付となった。九月二十六日、安藤靱負が国元の家老となり、綱国付の御用を勤める者が用人伊達与兵衛一人となった。⁽⁴⁴⁾ 安藤の家老就任は、山田の跡役としての意味を有したと考えられる。

十一月一日、佐久間奎之助は「諸事勤方家老共ニ指統相勤候様」との上意により事実上の家老となり、宣富に随行して家臣に加わった笹木兵左衛門が用人となつて「御側御用相達候義ハ向後御免」となった。笹木の後任として小須賀帶刀惣領三郎兵衛が側用人に任じられた。今回、佐久間奎之助には「加増等可被 仰付候へ共、此節之儀ニ御座候故、先延引被遊候」と、笹木兵左衛門には「小身故追而御心付茂可有之候」とそれぞれ加増を見送られた。その原因は、九月六日の火災により江戸の柳原上屋敷と元禄十年十一月二十七日に受け取った本所下屋敷の両屋敷が類焼したと密接に関係していると思われる。なお、類焼により、幕府から九月二十三日、金一万両を拝領し、九月二十七日、柳原上屋敷の替え屋敷として鍛冶橋に上屋敷を受け取った。

金一万両と替え屋敷の拝領をもつてしても、この両屋敷類焼は成立当初の津山藩財政にとって過重の負担であつたと思われる。前年九月四日より「御勝手惣吞込」を勤めていた西尾源右衛門⁽⁴⁵⁾に対し翌元禄十二年六月二十八日、「御国元江被遣、酒運上・川鉄運上等之儀取立情出可申事。其外御為宜儀見分仕、大森与左衛門相談申、宜様可被致候事。」との指示が出された。西尾源右衛門は元禄九年二月十一日、「勝手向巧者」として五人扶持にて出入り奉公を開始した人物である。大森与左衛門は元禄十二年二月頃に知行三〇〇石で召し抱えられ、津山派遣を指示され

た人物であり、大森も「勝手向巧者」の資質によつて召し抱えられたものと考えられる。六月二十九日、大橋十太夫は用人となり、「江戸御勝手方惣吞込ニ可情出。尤、大森与左衛門江諸事申付、与左衛門与相談仕候而、御為ニ宜様思案仕、諸役人江可申付。」「江戸定詰仕、佐久間全助江相談申可相勤。」等の指示を受けた。これにより、江戸に家老佐久間全之助、勝手方専任の用人大橋十太夫、そして国元に「勝手向巧者」大森与左衛門・西尾源右衛門を配置し、勝手向の政務をより一層強力に推進する体制に移行したといえる。その結果、十月十三日、大森は「於御国元能相勤候。御物成取立等宜相働候段達 御聴」召小袖二・羽織一を拝領した。高倉騒動が⁽⁴⁸⁾発生した翌年であるにもかかわらず、大森は元禄十二年の物成取り立てに巧妙な手腕を発揮したと推測でき、この体制への移行は一定の成果をもたらしたものと思われる。しかし、翌年に至っても江戸両屋敷類焼の影響は津山藩財政に負荷を与え続けたようであり、十二月一日、藩は、江戸両屋敷類焼による不勝手を理由に、家臣に対し元禄十三・十四年の借り上げと召し使いの減少、粗衣類着用許可からなる儉約実施を申し渡した。⁽⁴⁹⁾元禄十三年からは銀札が発行された。この政策は藩財政窮乏への対応策としての一側面を有していたと考えられる。⁽⁵⁰⁾

元禄十二年十二月二十五日、宣富は左近衛権少将となり、⁽⁵¹⁾翌年正月元日の登城のさい、「御献上物式拾万石以上の御格被 仰出」た。元禄十六年十一月九日には、宣富に秋田藩主佐竹義处娘岩が来嫁した。これらの官位昇進・石高不相応の家格・⁽⁵²⁾宣富婚姻による出費も藩財政を一定程度圧迫したものと思われる。

元禄十五年六月六日、松平宣富は津山に初入りした。これを契機として、家臣団内家格の形成が進展する。翌七日、御譜代と古参の惣領に関する規定が示された。⁽⁵³⁾

一、向後御譜代之惣領御譜代准之。古参之惣領者親之家督被 仰出候而古参准之旨被 仰出。

これによると、御譜代の惣領は家督相続以前であっても御譜代に準じ、古参は家督相続後古参に準ずる。よつて、津山藩時代の古参は柳原時代の古参の規定を踏襲したものと考えられる。柳原時代の古参が津山藩時代には御譜代

に、同様に柳原時代の新参が古参に位置づけられたのであるから、家格上昇の内実の一つには惣領の地位向上を含
有していたといえる。六月十五日、書状を認めるさいの片名字・文法そして見廻に関する指示がなされた。⁽⁵⁴⁾

元禄十五年八月二十八日、用人の役職名が年寄に変更され、大熊六左衛門惣領主水・佐久間奎之助惣領外記がそ
れぞれ年寄見習となった。⁽⁵⁵⁾十二月朔日、渥美権左衛門・小須賀帶刀・大熊六左衛門・山田主膳・安藤靱負・佐久間
奎・安藤斎宮・佐久間主計・本多宇右衛門を侍大将とし、そのうち本多宇右衛門を中老とし、彼らに年始引渡のさ
いの返盃を認めた。⁽⁵⁷⁾侍大将には、当時の家老か、年寄のうちの中老を対象に任じられたことがわかる。そして侍大
将の嫡子も父同様に年始引渡のさい返盃するようにという指示がなされた。これらをうけて元禄十六年正月元日の
儀礼が執り行われた。⁽⁵⁸⁾

一、辰之中刻於 御座之間

渥美権左衛門 小須賀帶刀 大熊六左衛門

安藤靱負 佐久間奎 安藤斎宮

本多宇右衛門 渥美隼人 小須賀一学

大熊主水 安藤太郎左衛門 佐久間外記

右何茂御太刀・馬代献上、御目見畢而御引渡御盃被下之、各返盃、御目録を以五百疋ツ、御手自被下之。右
何茂熨斗目長上下、御太刀伊藤金左衛門・加藤場左衛門披露之。御奏者兩人熨斗目半上下。右畢而佐久間主
計御太刀献上。金左衛門披露之。右馬代銀壺枚宛也。

一、芥子之間江被為 入、

伊藤善八郎 伊達与兵衛 笹木兵左衛門

大橋十大夫 黒田要人

右御太刀代献上、御目見畢而御盃御熨斗鮑頂戴之。御目錄を以三百足ツ、被下之。本多宇右衛門相渡之。右各熨斗目長上下。御給仕右同断。御太刀伊藤金左衛門・加藤場左衛門披露之。右馬代金二百足宛。

一、皇帝之間江御出、御流被下之。伊藤金左衛門・加藤場左衛門始御譜代・古参・新参大番頭より番外・御小姓組・中奥組岡瑞伯迄御流被下之。右之面々席之次第別帳ニ記。御土器金左衛門・場左衛門取次渡之。

翌二日、芥子之間にて御譜代隠居渡部勘解由の御目見の後、次の儀礼が執り行われた。⁵⁹

一、於皇帝之間、御譜代・古参之大番頭惣領其外物頭の惣領御流・御熨斗鮑頂戴之。古参之医師・同大番組・小従人組・大役人。右畢而新参之医師・大番組・大役人迄御流・御熨斗鮑頂戴之。右之内、十五歳以下之面々者御目見名披露計。

これらの記述は家老とその惣領、年寄、御譜代・古参・新参大番頭から中奥組、御譜代・古参大番頭惣領から物頭惣領、古参の医師・大番組・小従人組・大役人、新参の医師・大番組から大役人という、家格と職階による明確な序列を部屋の区別、引渡の有無、そのさいの返盃の有無、献上物の有無とその金額、御目見順等を通じて儀礼の場で表現している。この記事から、当時渥美・小須賀・大熊・安藤靱負・佐久間全・安藤斎宮・佐久間主計と光長付山田主膳の八家を家老家に、同様に本多・伊藤・伊達・笹木・大橋・黒田と光長付加藤又五郎の七家を年寄家に設定したと考えられる。私見の限り、元禄十六年以前の「江戸日記」・「日記」〔国元日記〕においてこれほど詳細な年始儀礼の記事は見当たらないこともあり、特にこの記事は津山藩初期における年始儀礼の一つの到達点としての意味を有していたのではないだろうか。初代藩主初入り後初の年始儀礼は、大名とその家臣との主従関係、そして家臣団内の秩序を体现する重要な契機になったものと思われる。

宝永三年（一七〇六）正月十三日には、次のような規定が加えられた。⁶⁰

一、去年中被 仰出候大將分之長男年始引渡之儀計親之通被 仰付。其外献上物・被下物ハ年寄中同前二可仕之旨故、当元朝(明考)ニも大將分長男献上物・被下物も年寄中同事ニ有之由、東武方申来。

年始の儀礼のさい、大將分の長男は大將分と同様引渡のとき返盃し、献上物も拝領物も年寄同様とするという規定である。前述のように、侍大將には家老と中老の年寄が就任したから、元禄八年十二月十六日の家老・用人惣領の規定に加え、これらの規則と元禄十一年八月十五日の家老・年寄（當時は用人）等の下屋敷拝領には、家老と年寄のあいだに中老という格を設け、家老と中老を侍大將とすることで家老と中老ではない年寄との格差を広げ、年寄とそれ以外の家臣との格差を設け、結果としてその格差を単なる個人の資質によつて昇進可能な職階上の格差ではなく、家老を世襲する家、中老を極官とする年寄家、年寄を極官とする家とそれ以外の家のそれぞれに排他性を付与し、家単位で極官を定着させる意図を有したのではないだろうか。このことは、前述のように、家老大熊・佐久間奎之助惣領がそれぞれ年寄見習となり、家老家の初役が年寄見習として定着していったことも無関係ではあるまい。

宝永元年六月十五日、宣富の二度目の国入り後、国元において家中に対し、三年間の借り上げ、家老以下の礼勤の簡略、京金調達による俵取・扶持方取への貸し付け、今後二・三年間の網干金取り立て用捨を申し渡した。⁽⁶⁾ すなわち、宝永元年の時点では、国元において家中から借り上げを実施する一方、藩が京金・網干金を才覚して国元家中に貸し付けるといふ国元家臣救済策を講じており、元禄十三年の時点に比べ、国元家臣の家計逼迫が一層進行していた様子が窺える。

宝永二年十一月五日、江戸鍛冶橋上屋敷が類焼した。藩は十二月二十二日、幕府より当年の拝借米返納を免除され、京都の蔵元河井重右衛門に御用金を賦課して対処した。⁽⁶⁾ 翌年に至つても江戸屋敷類焼は藩財政を圧迫したようであり、宣富の三度目の国入り後の宝永三年十月一日、藩は国元において家臣に対し、「先年より御家中之面々物

成・扶持方・給金之内御借被成候」分について「段々御物入多御不勝手ニ付御勝手御潤色被成候迄」の返済延期と、国元において家臣より宝永元・二年の借り上げ分については返済し、京金の元利取り立てについて、今年は利銀のみ指し出すようにとの申し渡しがあつた。⁽⁶⁴⁾十一月一日、江戸において「津山に被遣候書付」として、「御家中御貸米」につき「御普請旁御物入故御潤色迄御貸被成候旨」を申し渡した。以上から、元禄十三年の借り上げは国元・江戸双方の家臣を対象とし、宝永元年の借り上げは国元家臣のみを対象としたこと、元禄十三年の借り上げについては宝永三年時点でも未済であり、その理由の一つとして藩は江戸屋敷類焼に伴う普請入用を指摘していたことがわかる。宝永四年には損毛高三万五三〇〇石余りの「在所両度之風損⁽⁶⁵⁾」と松平光長の葬送⁽⁶⁶⁾があり、これらによつて藩財政は一定程度圧迫されたものと思われる。

宣富の四度目の国入り後の宝永五年九月初日、書付をもつて借り上げの本高直しと儉約に関する申し渡しがあつた。以下、本高直しに関する条文のみ引用する。⁽⁶⁷⁾

一、殿様御勝手于今御直り不被成候得共、御家中数年難儀之由達 御聞候間、先年より御借り被成候物成免相、当年より本高二御直シ被遊候。依之、扶持方取・給金取迄順之被下候。御譜代四ツ免・古参石取三ツ八分・新参石取三ツ五分、俵取者古参・新参共二俵数之通被下之事。

これによると、知行取の免相が家格により異なっていたことがわかる。この格差が判物下付の段階で設定されたのか、あるいは今回の本高直しのとき改めて設定されたのかは不明であるけれども、免相の基本を四ツとした場合、古参・新参知行取から免相の一部の藩財政への恒常的繰り入れを意図したと理解でき、免相の基本を三ツ五分とした場合、柳原時代の「古参之扶持方」を津山藩時代では免相格差を通じて御譜代と古参に対して踏襲したと理解できる。いずれにせよ、家格による知行取の免相格差の存在は、家督相続、儀礼上の格差とともに、津山藩家臣団内の家格を体现する点で重要な意味を有したと考えられる。

そして、この文言からは、津山藩の知行取は御譜代の全員と一部の古参・新参によって構成されていたと推測できる。「宝永五年正月津山藩士分限帳」^⑧に記載のある知行取を「勤書」に基づいて比定すると、家臣の総数六二六名（足輕以下を含まない）のうち知行取は一〇五名であった。知行取の内訳は、御譜代四二名・古参一四名・古参御取立一〇名・新参一名・不明三八名であった。同様に、十万石時代の「享保十一年津山藩分限帳」^⑨をみると、家臣の総数六二六名（足輕以下を含まない）のうち知行取は九四名であった。その内訳は、御譜代三三名・古参二五名・古参御取立九名・新参八名・不明一九名であった。「勤書」によると、御譜代三名家・古参二名家・古参御取立四五家・新参のうち当時士分の新参であった可能性のある新参一〇一家と士分新参並家三八家の合計一三九家が記載されており、御譜代全員と少なくとも古参の大半によって知行取の半数以上が占められていた。この結果は前述の推測を裏付けるものである。津山藩において、御譜代全員と少なくとも古参の大半によって知行取の半数以上が占められていた事実、そして知行取であっても家格によって免相が異なつた事實は、俸禄面においても家臣団内における家格の優越性を表象する装置として津山藩では知行制^⑩が設定されたことを示しているのではないだろうか。宣富の初入り後である元禄十五年九月二十七日、家督相続のさいの俸禄につき、部分的ながら次のように設定された。^⑪

一、八十俵^⑫五十俵十人扶持迄向後家督之時分十五歳迄之もの者五人扶持被下候筈ニ有之。但、十六歳以上者兼而御定之事。

八〇俵から五〇俵一〇人扶持までの俸禄の相続は、相続者が十五歳以下の場合には五人扶持、十六歳以上は以前定めたと通りであると解釈できる。前述の元禄十六年正月二日条にも「十五歳以下之面々者御目見名披露計」とあり、十五歳以下と十六歳以上という年齢階梯により格差を設けている。十六歳以上の俸禄相続について定かではないけれども、当時の財政逼迫を鑑み、津山藩の相続制度が部分的ではあれ、十五歳以下の場合、俸禄の大幅削減を盛り込

んでいたことがわかる。この制度は財政負担の軽減を意図していたものと思われる。前述のように、当時御譜代は全て知行取であつたので、この規則は古参（古参御取立を含む）と新参の一部に適用されたと考えられる。なお、知行取への判物下付は、元禄十五年十二月二十五日になされた⁽⁷⁾。

津山藩士に関する法令集でほぼ唯一現存する「享保四亥年諸御定帳 延享四卯年御定書追加」の享保四年（一七一九）の規定には、

一、御譜代面々者、実子縦幼少、又為養子其家督無相違可被仰付事。

一、古参之面々、親之跡式十五歳以下者三分二可被下。十六歳以上御番茂相勤候程之ものニハ不残被下候事。

一、新参之面々、拾五歳以下ハ親之跡式半分可被下。十六歳以上御番も相勤候程之ものニハ不残可被下事（以下略）。

とあり、延享四年（一七四七）の「御定書追加」には、

一、御譜代之面々ハ、幼年たりといへ共、父跡式無相違可被下事。

一、古参之面々ハ、父之跡式被下候儀、拾六歳以上奉公相勤候者ニ候ハ、無相違可被下之。拾五歳以下之者ハ、三分二被下之。十六歳相成、番等相勤候節ニ至り、本高二御直可被下事。

（中略）

一、新参之面々、父之跡式被下候儀、十六歳以上奉公相勤候者ニ候ハ、無相違可被下之。十五歳以下之者者、半減被下之。十六歳相成、番等相勤候節者、本高二御直可被下候事（以下略）。

と記され、その他にも大目付以上、医師等に関して項目が増えている。まず、元禄十五年と享保四年の規則を比べると、元禄十五年の場合は断片的ながら俸禄と相続者の年齢を基準とするのに対し、享保四年の場合は家格・相続者の年齢とその時点における番勤めの有無を基準としており、大筋で俸禄から家格へと基準の変化が認められる。

そして古参・新参とも俸禄削減の大幅な緩和を指摘できる。御譜代の相続制度は当初から世禄制であり、このことは津山藩家臣団内における御譜代の優越性を盤石にしたと考えられる。⁽²⁵⁾享保四年の規則では、古参（古参御取立を含むと思われる）は十五歳以下であれば跡式の三分の二、新参は同様に半分の相続しかできない取り決めとなっている。延享四年の改定では、御譜代の項目に変化は見られない。しかし、古参・新参について、十五歳以下の減少割合は同じであるけれども、十六歳になり、番勤めが可能となれば本高への復帰が付加されている。

このような元禄十五年から元文元年、そして延享四年への変化の背景は何であろうか。

享保四年・延享四年当時の財政状況についてみると、「享保二年以降御成箇通記」⁽²⁶⁾によれば、年貢米の納入状況は享保二年の納入高を一〇〇とした場合、享保三年の指数は九九・七、同四年も前年比は九九・七であった。享保四年当時は、享保の改鑄、正徳五年（一七一五）十二月晦日と享保二年（一七一七）正月二十二日の江戸鍛冶橋上屋敷類焼⁽²⁷⁾の影響により、享保三年の高割による寸志指上米に続き、三割を上限とする借り上げが実施されていた。⁽²⁸⁾よって当時の藩財政は予断を許さない状況下にあったものと考えられる。同様に、「享保二年以降御成箇通記」によれば、延享四年の年貢納入高指数は前年比九六・一である。因みに延享元年は九九・二、同二年は九八・六、同三年は二歩（二％）加免して一〇六・一であった。元文四年以来、藩は家臣への物成米を銀札渡しにしていたから、延享四年の藩財政も元文元年と同様の状況であったと思われる。⁽²⁹⁾

以上から、藩財政の悪化と古参・新参の相続者が十五歳以下の場合の俸禄削減の緩和という一見矛盾する現象が明らかになった。このことは、財政逼迫によって家中救済の方策を失いつつあった藩が俸禄削減の緩和による家督相続の安定化を家臣救済政策の一環として位置づけたことを意味するのではないだろうか。そして、家格による相続上の格差の発生は、救済するべき家臣の優先順位の指標を家格に置いたことを裏付けるものであると考える。

おわりに

以上を要約し、津山藩家臣団形成の背景について若干の私見を述べる。

光長と綱国の供奉者は、越後騒動の処分申し渡しから配流先出立までの短期間に編成された。その構成員を分析すると、旧高田藩士を中核としてはいるものの、二一人（光長・綱国付きの約三五％）を新たに「御取立」・「御抱」えによつて補充し、漸くその体裁が整えられている。

松山・福山配流時代は、幕府の指示により光長以下全員が「無刀」であり、貞享四年十一月朔日に光長配流赦免の老中奉書が到着するまで光長とその供奉者は帯刀できなかった。津山藩成立以後、光長・綱国供奉者が「御譜代」の家格を得、家督相続、俸禄、儀礼等で他の家中より優遇された根拠の一つとしてこの事実は重要であると思われる。

松山・福山配流時代当初は、佐久間主計と渥美の両用人に担われていた御用の相談役として無役黒田と大横目伊藤が参画し、さらに両用人に準ずる立場に膳番役山田が就任し、末期には無役黒田と大横目伊藤以上に両用人への発言権が認められた近所用達の小須賀と大熊が登用された。この松山における家政構造と家臣団が柳原時代の基盤となった。

柳原時代は松平直矩・松平綱近・松平直明・松平近栄・松平直丘と後に松平吉品を加えた六人からなる越前家一門を媒介に幕府との交渉がなされたのみならず、光長と綱国の家政についても一門と相談しつつ執り行われた。一門うちでは宣富実父松平直矩と松平近栄の両人が越後騒動のときと同様に中心的役割を果たしたと考えられる。

貞享五年二月七日、幕府から佐久間主計と渥美両名による「軽キ」者の召し抱えを許可され、二月十八日には光長以下が侍分の召し抱えを一門に通達した。当時「諸事穩便」と足軽以下の召し抱えについて目立たない程度の少

数とするようにという一門の意向と、光長と綱国、そしてその家中の行動が一定程度制限されていたことを勘案すると、光長と綱国が一門からの侍分の新規召し抱えを優先したのは当然の帰結であつたと思われる。

柳原時代当初、山田、小須賀、大熊は松山・福山配流時代末期における松平光長家の家政構造を踏襲して佐久間主計・渥美の次席に位置づけられた。その後、佐久間主計の病氣を理由に、旧綱国付で当時奏者番を勤め、第三位の席次にあつた本多を渥美と同格にして三人による御用の執務体制となつた。しかし、本多の死去によりこの体制は途絶した。元禄八年、佐久間主計の死去を契機に山田・小須賀・大熊は渥美と同格となり、加藤又五郎と佐久間奎之助、そして綱国付の伊達与兵衛が「御用人之格」となり、従来佐久間主計と渥美によつて担われていた職務の一部が加藤又五郎と佐久間奎之助に移譲された。

家老と従来の家老の職務移譲によつて創設された用人による御用執務体制への移行は、「月番御勝手方」という文言から窺えるように月番制の導入を可能にし、より安定的な案件処理を実現する意図と、家老の一部の職務の用人への移譲により、当主の執務の一部を従来以上に代行ないし補佐しうる担い手として家老を従来以上に位置付ける意図を有したものと思われる。

このような組織的な御用執務体制への移行の背景として指摘できるのは、越後騒動以来越前家一門の中核にあつて松平光長を支えてきた松平直矩が元禄八年四月十五日に死去したこと、当時八一歳という当主光長の年齢、そして前述の光長筆頭家臣佐久間主計の死これら三点である。光長は従来家政を支えてきた松平直矩と佐久間主計を失つた。光長自身八一歳という高齢の当主であつたのみならず、元禄六年に光長の養子となり、元服を元禄八年六月十八日に控えた源之助矩栄の家督相続に備え、光長は光長自身と源之助の補佐役としての役割を家老に付与する措置をとつたのではあるまいか。家老・用人による執務体制の組織化は、一方で家老家・用人家という家格の創出をもたらしした。

柳原時代の光長家臣団には、古参と新参という家格が存在し、それによって扶持米の支給額と俸禄の渡し方の双方において格差があり、古参は松山に供奉した者と光長が貰い受けた旧綱国付の家臣によって構成されていた。一方新参は古参惣領と一門から召し抱えられた者等柳原時代に召し抱えられた者によって構成されていた。

元禄十一年、松平宣富が綱吉から津山城と美作国のうち十萬石を拝領直後、家臣の新規召し抱えと足輕・徒の格上げに並行して「古参」の上位に「御譜代」という家格が設定され、それらの家格に属する者への加増がなされた。御譜代は「勤書」の記載からしても柳原時代の古参が、同様に古参は柳原時代の新参が格上げされたといえる。そして、津山藩成立後に召し抱えられた家臣が新たに「新参」に位置づけられた。

元禄十五年の宣富初入りを契機に津山藩家臣団内の家格形成が進展した。翌年正月元日の年始儀礼は一つの到達点であったと考えられる。藩主の国入りは家臣団形成以外の藩政の諸制度を整備する転機ともなっていた。

宝永五年の書付の分析により、御譜代・古参・新参の家格ごとに知行取の免相が相違したこと、御譜代全員と少なくとも古参の大半によつて知行取の半数以上が占められていたことを明らかにした。この事実は、俸禄面においても家臣団内における家格の優越性を表象する装置として津山藩では知行制が設定されていたことを示していると考えられる。

元禄十五年の家督相続の規定では、部分的ながら一定の俸禄内において家督相続者の年齢を指標に俸禄の大幅削減が盛り込まれていた。享保四年の規定では、家格、相続者の年齢とその時点における番勤めの有無を基準としており、大筋で俸禄から家格へと家督相続の基準の変化が認められる。御譜代には当初から世禄制を適用し、古参・新参には格差を設けつつも俸禄削減の緩和がなされた。延享四年の改定では、古参・新参の俸禄削減の緩和が一層促進した。元禄十五年・享保四年・延享四年の各時期とも財政逼迫の状況であったから、藩財政悪化と俸禄削減緩和という一見矛盾する現象については、財政逼迫によつて家中救済の方策を失いつつあった藩が俸禄削減緩和によ

る家督相続の安定化を家臣救済政策の一環として位置づけたことを意味し、家格による相続上の格差の発生は、救済すべき家臣の優先順位の指標を家格に置いたことを裏付けるものではないかとの仮説を提示した。

一般に、過去の軍功と将来に対して約束した軍事的貢献の度合いが大名家における身分的階層序列の基準となつたと言われている。⁽⁸⁰⁾しかし、これまでみてきたように元禄期に成立した津山藩の場合は軍功を基準に家臣団の序列、特に家格が形成されたとは考えにくい。また、佐藤氏の言うように、単に召し抱えられた年代の古さを基準に家格が形成されたとも思えない。⁽⁸¹⁾津山藩の場合は越後高田藩時代の先例と家格を踏襲しつつも、「無刀」の時代、すなわち当主松平光長と嫡子綱国が罪人として扱われた時代を起点に家臣団を形成したことが決定的な意味を有したのではない。高田藩士の圧倒的多数が光長・綱国のもとを去るなかで、一部の側近が中心となつて供奉者を編成し、光長・綱国に随行した。そして柳原時代も源之助を養子とする頃までは少なくとも様々な制約のもとで息を潜めていたように思われる。このようないわば負の歴史を光長・綱国とともに乗り越えてきたことが柳原時代・津山藩時代に至つてそれぞれ功績となり、家臣団形成の原理となつたのではないだろうか。

本稿では紙幅の都合もあつて津山藩成立の背景、宣富期の津山松平家の家格等について詳論できなかった。⁽⁸²⁾今後の課題としたい。

註

社、一九九五年）一四〇―二三頁。

(1) 竹内知恵「津山藩家臣団の家筋考」(『郷土館案内』第
五号、一九八六年)。

(2) 『岡山県史』第七卷(岡山県史編纂委員会、岡山県、
一九八六年)四四〇―四八頁。

(3) 『津山市史』第四卷(津山市史編さん委員会、広陽本

(4) 磯田道史「津山藩領山北村の足輕・中間奉公」(『日本
研究』第二四集、二〇〇二年、後、同『近世大名家臣団
の社会構造』東京大学出版会、二〇〇三年所収)

(5) 佐藤宏之「大名家臣団の再編成とその構造」(『日本
歴史』第六六九号、二〇〇四年)

(6) 津山郷土博物館所蔵。

(7) 拙稿「津山藩の安永改革」(『鷹陵史学』第二十九号、二〇〇三年)。「勤書」成立についても若干言及した。

(8) 「宝永五年正月津山藩士分限帳」(『津山温知会誌』第六編、津山温知会、一九一三年、所収)

(9) 平井真澄「懷旧隨筆」(明治四十二年(一九〇九)『津山温知会誌』第四編、津山温知会、一九一一年、所収) 八七頁。

(10) 山本雙松「鶴山藩譜抜抄」(明治十九年(一八八六)『津山温知会誌』第十二編、津山温知会、一九二〇年、所収) 四四頁。

(11) 「懷旧隨筆」 八八頁。

(12) 津山郷土博物館所蔵。

(13) このときの上意の内容について、『井伊年譜』(E—二九) B本天和元年六月二十六日条に、次のような記述がある(『彦根藩井伊家文書』彦根城博物館所蔵)。

同廿六日、井伊宅へ光長を呼請、伊達遠江守宗利同道、御書院ニ而上意之趣被仰渡。其身家中ノ仕置不調法ニ仕候故、騷動ニ及候。御類被成候家ニ無之候得共、天下ノ御仕置ニは難替被思召、領地被召上、松平隠岐守へ御預被成候。依之、道中被召連ニハ京極備中守へ被仰付候之由、美濃守演説之(以下略)。

そして翌二十七日条には次のような記述がある。

同日、国持大名を始万石以上在江戸ノ面々及諸役人登城。老中列座、稻葉正則演説口上。昨日松平越後守義、家中仕置不調法ニ付領地被召上、御預被仰付

候。各承知可有候也(以下略)。

この記事によれば、諸大名・諸役人に対する上意演説とは異なり、光長本人に対する上意には、「御類被成候家ニ無之候得共、天下ノ御仕置ニは難替被思召」と光長の家に配慮した文言が付加されていたとも解釈できる。なお、本史料の存在については彦根城博物館史料課学芸員渡辺恒一氏の御教示による。ここに記して謝意を表する次第である。

(14) 以上の出典は「光長卿」(『上越市史』別編五 藩政資料一、上越市史編さん委員会、一九九九年、所収)である。

(15) 「松山并福山江御供名面帳 柳原分限帳并順席帳」(『上越市史』別編五 藩政資料一、上越市史編さん委員会、一九九九年所収)。この史料は、二種類の帳面を合冊したもので、いずれも元禄二年(一六八九)の作成である。

(16) 越後高田藩士の確定は、「(延宝年間)越後中将家分限帳」(『新潟県史』資料編六 近世一 上越編、新潟県、一九八一年所収)の記載の有無で行った。この史料を採用した理由はこの史料が、時期の推定されたものを含めて、越後騷動に最も近い時期の家臣団構成を示すと考えられているからである(内野豊大「越後騷動の基礎的考察—高田藩分限帳の検討を通して—」『上越市史研究』第七号、二〇〇一年)。

(17) 館孫兵衛の父館喜左衛門を含む。

(18) これには寺社・大肝煎・柏崎庄屋を含んでいない。

(19) 詳細は佐藤宏之「越後騒動に関する一考察―幕藩權力構造分析の視点から―」(大石 学編『近世国家の權力構造―政治・支配・行政―』岩田書院、二〇〇三年)参照。

(20) 「江戸日記」貞享三年十二月二十六日条に、「今晚当地抱之足輕共へ御料理被下置也」とある。彼らがどのような経緯で召し抱えられたのかは不明である。

(21) 「江戸日記」延宝九年六月二十七日条。

(22) 「江戸日記」天和二年九月九日条に、

一、今夕御手前二而御茶主計・権左衛門可被下之御意之趣、六左衛門方被申渡也。酉刻時分罷出候処、御相伴二而御菓子頂戴、夫ら御手前二而御茶被下置、彦四郎も被相加也。

と光長の茶会に佐久間・渥美と黒田が招かれており、當時より無役ながらも黒田が佐久間主計、渥美に次ぐ地位にあったことが窺える。なお、「江戸日記」天和二年三月二日条に、

一、光公御前江自分儀被召、去冬茂被仰聞候通、諸事無遠慮主計同前御用可相達候。病氣差出之刻者主計迄断、御用ニ茂構申間敷由、色々御懇ニ御意共有之、自分義茂存寄申上、御請仕退出ス。

との記事があることから、松山・福山配流時代の「江戸日記」の主体は渥美であり、この日を画期として渥美の「御用」への関与は深まったと思われる。

(23) 「江戸日記」貞享四年正月三日条に、

一、伊藤善八儀、旧冬より相煩、今日初而罷出也。

三ヶ日之内故、御熨斗被下置也。跡々茂大將分老中之外元日過御熨斗被下置候例も無之候。雖然今日善八ニ被下候上者、向後三ヶ日之内者誰ニ而も被下可然之由内談致置也。尤、藤兵衛・六左衛門招二而遂詮義置也。

前述のように、松山・福山配流時代の「江戸日記」の主体は渥美であると考えられるので、「内談」は渥美と佐久間主計によつてなされ、それに小須賀と大熊が招かれたと解釈できる。よつて、貞享四年八月十五日の直達以前にも小須賀と大熊は佐久間主計と渥美の求めにより相談に應じていたことが史料上確認できる。

(24) 「江戸日記」貞享五年五月十六日条に、

一、兵部様・中務様江為御使者鈴木喜右衛門被遣。是者向後諸事御用之儀ニ付、大和守様・上野介様御一所ニ御相談御加り可被成候旨大和守様方依被仰進、其御礼且又時節御見廻旁御口上被仰遣之。

とある。松平吉品等の参画が遅滞した理由として、越前福井藩では延宝二年(一六七四)、家督相続に悩んだ當時の藩主光通が自害し、貞享三年(一六八六)に改易となり、改めて幕府より従来の領地四七万五千石のうち二万五石を与えられており、当時内政が混乱していたからではないかと目下のところ考えている。

(25)

越後騒動における越前家一門の関与については福田千鶴「幕藩政治史上の越後騒動」(『上越市史研究』三号、一九九八年、後同「幕藩制の秩序と御家騒動」校倉書房、一九九九年所収)を参照。

(26) 『津山温知会誌』第七編(津山温知会、一九一四年所収)

(27) 佐藤氏はこの点につき、当時の光長と綱国の立場について言及することなく、「一門による『御家』の救済であり、一門によつて『家』を編成しようとする論理」と能動的に評価する。私は、当時一定の外出制限下にあつた光長・綱国とその家臣が「穩便」に、目立たぬように、侍分を新規に召し抱えるには、一門からの召し抱えを優先せざるをえなかつたのではないかという点を強調しておきたい。

(28) 黒田彦四郎は「江戸日記」貞享五年正月十五日条によると、貞享四年十二月十日頃に死去している。

(29) 「高田」によれば、高田藩時代、本多は「御奏者番・御歩行頭」、加藤又五郎は「三河守衆小納戸・御膳番兼役」、大橋は不明、館は「三河守衆中小姓横目」、加藤馬左衛門は「三河守衆御供小十人」であり、概ね先役に就任したといえる。

(30) 「高田」によれば、高田藩時代、大橋十太夫は稲子の守役を勤めた。

(31) 「勤書」山田次郎三郎の項、津山郷土博物館所蔵。

(32) 伊藤の座順が加藤又五郎の上席となつたことは、元禄三年正月元日の御目見から確認でき、今回の役替えによるものではない。

(33) 「江戸日記」元禄八年九月二十三日条に次の記載がある。

一、児玉五左衛門義、一月二一兩度ほと被為召、御

仕舞御稽古被成度思召之由、以笹木兵左衛門被仰出。則一兩度程ツ、被為召候様ニ相極り、則兵左衛門ニ加藤又五郎申伝之。

また、「江戸日記」同年十一月二十八日条には、家臣からの借り上げに関する「口上之覚」を光長の大横目が読み渡した後、「右之趣頭分江寄々相伝之。伊達与兵衛方へ又五郎・奎助申遣」とあり、「江戸日記」同年十二月十七日条にも、「御譜代」からの借金に関する「覚」の引用の後、「右之趣加藤又五郎・佐久間奎助御譜代之面々江相逢候」との記載がある。

(34) 本来ならばこの部分に長坂主税ではなく本多が名を連ねるのが適當であると思われるけれども、この点についても不明である。

(35) 矩榮は元禄七年十二月二十三日、光長から一字拝領して長矩と改名した(「光長卿」四一五頁)。宣富と改名したのは宝永六年十一月十三日である(「徳川諸家系譜」第四、一一二頁)。以後本稿では宣富で統一する。

(36) 高田藩時代の家老の格式については不明である。因みに「江戸日記」元禄九年正月十八日条には、

一、渥美権左衛門倅・小須賀帶刀倅、先頃御目見被仰付候附而、兩人共折々罷出相勤申度旨願申上候付、兩人義格式茂違候間、勝手次第相詰候様被仰付之。兩人申上候茂若殿様御芸御稽古被遊候御合手之ためにも罷成候間、若殿様御方江相詰申度由。是又願申上候付、願之通被仰付。

とあり、家老の倅(おそらく惣領)が別格の地位にあつ

たことを示している。

- (37) 「江戸日記」元禄十年十二月二十三日条には、渥美源内と小須賀三郎兵衛が「御用人之頭」、「只今ハ主計之次ニ被仰付」とある。しかし、同日条には祝儀の盃を献上する記事があり、そこの佐久間主計の座順は加藤又五郎・佐久間奎之助・本多宇右衛門の三用人の次であり、小須賀は元禄十一年十一月朔日、用人より格下の側用人に任じられた（「江戸日記」）から、渥美と小須賀がこのとき仰せ付けられたのは「御用人之頭」ではなく「勤書」の「御用人次席」が的確であると判断した。なお、津山藩時代の家老惣領の初役は年寄見習（「日記」〔国元日記〕元禄十五年八月二十八日条によると、この日用人は年寄へと名称変更した）であった。
- (38) 館孫兵衛の父館喜左衛門を含む。
- (39) 一例を示すと、「江戸日記」元禄七年正月十五日条に、
一、大殿様八十御賀二付、此方様・御向様・古参之面々御肴代差上候。
- とあり、同年正月十八日条に、
一、御譜代之面々、先日御賀之御祝儀差上候付而、今日御料理何茂江被下之。
- と記されている。
- (40) 詳細は拙稿「近世初期の銀札―元禄・宝永期の津山藩銀札を中心に―」（『日本史研究』四七一号、二〇〇一年）を参照。
- (41) 「日記」〔国元日記〕元禄十一年五月二十五日条。
- (42) 「日記」〔国元日記〕元禄十一年六月朔日条。
- (43) 「日記」〔国元日記〕元禄十一年六月三日条。
- (44) 房間造酒の当時の役職等は一切不明であるけれども、重職にあつたものと推測される。なお、「宝永五年津山藩士分限帳」には小従人頭で百石の知行取として「房間長太郎」の名前があり、宝永五年には代替わりしていたと思われる。
- (45) なお、この点について佐藤氏は「三河様附衆、すなわち松平三河守綱国付の安藤靱負が家老として津山に赴任するよう申し渡されている。」「綱国の津山への移動のさいに、家老として安藤靱負・伊達与兵衛、用人として柴山治部右衛門が随行している」（四五頁）と指摘する。しかし、「江戸日記」九月二十六日条には、
一、伊達与兵衛、向後三河様御用者人にて相勤可申旨被 仰渡（以下略）。
- とあるから、津山に赴任するとき、安藤靱負はすでに綱国付ではない。また、当時「家老伊達与兵衛」、「用人柴山治部右衛門」という記載は私見の限り当該期の「江戸日記」にも「日記」〔国元日記〕にも見当たらない。柴山治部右衛門も「宝永五年正月津山藩士分限帳」によれば中奥頭で、年寄に名を連ねていない。
- 因みに、佐藤氏は「江戸日記」元禄十一年四月九日条から、「渥美権左衛門および用人大熊六左衛門は家老を、番頭伊藤善八・大横目佐久間奎助・本多宇右衛門・権左衛門子渥美平内は用人を勤めていたことが知られる。」（四五頁）と解釈する。しかし、大熊は「御用人之格」設定以前からの家老であり、伊藤善八家が初めて年寄格

になるのは宝永三年六月十一日であり(「江戸日記」、佐久間奎助は当時大横目を免ぜられて用人を専任しており、渥美平内は用人次席であつたから、誤りである。「御用人中善八平内」という記載方法からしても、当時伊藤と渥美平内が用人であつたと解釈するのは困難ではないか。

また、佐藤氏は「江戸日記」元禄十一年年六月十三日条と同年八月十五日条に登場する「帯刀」を当時側用人と比定する(四五頁)。しかし、当時小須賀帯刀は家老である。側用人に就任するのは小須賀帯刀惣領三郎兵衛であり、しかも元禄十一年十一月朔日のことである。

- (46) このとき西尾は、「小身にて切々上京致シ、御入用金才覚等致候付」勤金として年々十兩ずつの拝領を申し渡されており、この時点で一定の功績を評価されたものと考えられる。

- (47) 「日記」(「国元日記」)元禄十二年三月六日条。なお、「江戸日記」元禄十一年七月六日条によると、大森はこの日「京都・大坂御用精出候付、各別二付」紋付帷子一・麻袴一具を拝領しており、早速一定の成果を上げていたものと思われる。

- (48) 高倉騒動の詳細は、『津山市史』第四卷(津山市史編さん委員会、廣陽本社、一九九五年)一五四―一六二頁参照。

- (49) 「日記」(「国元日記」)元禄十三年十二月一日条。

- (50) 詳細は前掲拙稿「近世初期の銀札―元禄・宝永期の津山藩銀札を中心に―」参照。

- (51) なお、光長の極官は従三位右近衛中将、嫡子綱賢は直富同様従四位下左近衛権少将、養子綱国は元服時同様従四位上侍従兼三河守である(「光長卿」四〇七・四〇八・四一〇頁)。特に光長の極官については「大猷院殿御遺命之由内命有之」との註がある。光長の官位は寛文印知のさい、御三家を除く諸大名の筆頭であつた。

- (52) 「日記」(「国元日記」)元禄十三年正月四日条。津山郷土博物館所蔵。なお、「光長卿」によれば、光長は慶安元年(一六四八)の日光社参の拝礼時の予参のおり、「三家之次ニ侍座」し(四〇六頁)、延宝八年(一六八〇)七月十日、綱吉江戸城本丸移徙にともなつて登城し、白書院で長鮑を賜つたさい、「三家・甲府拝受して退き、次ニ光長卿・加賀中将同しく拝受」した(四一一頁)。また配流赦免後の元禄五年(一六九二)五月八日、家綱十三回忌法会により十一日廟前を拝礼した時も「三家同然」(四一四頁)との記載がある。

- (53) 「日記」(「国元日記」)元禄十五年六月七日条。

- (54) 「日記」(「国元日記」)元禄十五年六月十五日条。

- (55) 「日記」(「国元日記」)元禄十五年八月二十八日条。

- (56) 綱国の子。元禄九年八月二十八日、安藤の姓を名乗つて家臣に降下し、以後家老家の一つとなつた。

- (57) 「日記」(「国元日記」)元禄十五年十二月一日条。

- (58) 「日記」(「国元日記」)元禄十六年正月一日条。

- (59) 「日記」(「国元日記」)元禄十六年正月二日条。

- (60) 「懷旧隨筆」によれば、幕末期古参以下は平士であり(八七頁)、「平士の家に於ては一番頭を極官」(八八

頁」とある。大番頭以下が同部屋で御目見をする儀礼が平士の極官を規定していったのか、あるいはその逆であるのかは定かではないけれども、元禄十五年当時、大番頭が何らかの指標となっていたことは間違いないまい。

(61) 「日記」〔国元日記〕宝永三年正月十三日条。

(62) 「日記」〔国元日記〕宝永元年六月十五日条。

(63) 「日記」〔国元日記〕宝永二年十二月二十八日条によると、藩は早速御用金に応じたとして河井に「雲生之御腰差」一腰を与えた。

(64) 「日記」〔国元日記〕宝永三年十月一日条。

(65) 「日記」〔国元日記〕宝永四年十月六日・二十四日条。

(66) 詳細は前掲拙稿「近世初期の銀札―元禄・宝永期の津山藩銀札を中心に―」参照。

(67) 「日記」〔国元日記〕宝永五年九月一日条。

(68) 「津山温知会誌」第六編（津山温知会、一九一三年）所収。

(69) 「津山温知会誌」第五編（津山温知会、一九一二年）所収。

(70) 「津山市史」第四巻、一八頁参照。

(71) 「日記」〔国元日記〕元禄十五年九月二十七日条。

(72) 「日記」〔国元日記〕元禄十五年十二月二十五日条。

(73) 「岡山県史」第二十五巻（岡山県史編纂委員会、山陽新聞社、一九八一年、所収）五一七頁。

(74) 同右、五二二頁。

(75) 「懷旧隨筆」によると、「御譜代家は幼年家督といふ格段の御取扱あり、減祿捨扶持の事なし。末期に及び、悴

誰儀幼年当何歳に罷成候得共、御憐愍を以家督被仰付度旨勅書相添出願、御用番受取置かる。古参以下の平士は幼年の相統は許可なし。」（八四頁）とある。

(76) 「地方日用記」所収。

(77) 「江戸日記」正徳五年十二月晦日条・同享保二年正月二十二日条。

(78) 寸志指上米については「日記」〔国元日記〕享保三年九月朔日条、借り上げについては同享保四年三月六日条。

(79) 詳細は拙稿「近世中期の津山藩銀札―享保から宝暦期を中心に―」（『ヒストリア』第一八七号、二〇〇三年）参照。

(80) 笠谷和比古『近世武家社会の政治構造』（吉川弘文館、一九九三年）一六五頁。

(81) 前掲佐藤氏、五〇頁。

(82) 最近、津山松平家の家格について検討した論考として、内野豊大「越前松平家・加賀前田家の家格と陪臣叙爵について―十七世紀後期における―」（『中央史学』第二十七号、二〇〇四年）を得た。

(付記) 本稿は、二〇〇三年九月の佛教大学鷹陵史学会第十二回年次研究大会にて報告した内容を大幅に加筆・修正したものである。指導教授竹下喜久男先生をはじめ多くの方々より有益な御助言を賜り、津山郷土博物館の皆様には、史料閲覧の便宜をはかっていただいた。ここに記して深謝致します。